

捕鯨反対のその先

大津 隆文

最近『Seaspiracy : 偽りのサステイナブル漁業』というドキュメンタリー映画を見た。制作者の突撃的取材、幅広い論点展開が興味深かったので紹介する。

最初に登場するのが和歌山県の太地である。外国人ジャーナリストがいかにか地元警察等に警戒されているか、まるで敵地を取材するような雰囲気や伝えられる。そして多数のイルカが追い込まれ海が血で染まるというパターンだ。

高等な哺乳類である鯨を殺すのは残酷で可哀想というのが定番だが、制作者は捕鯨が海の生態系をアンバランスにすることを問題視する。キーワードは sustainability だ。とすると鯨だけの問題ではなくなる。マグロの乱獲や混獲 (bycatch) も問題だ。フランスの地中海では太地の 10 倍のイルカが混獲されている。

さらに魚を根こそぎ捕獲するトロール漁業は海の生態系を大きく荒らしている。アフリカ沿岸では外国の大型漁船の違法操業により地元の漁師は魚が捕れなくなり困窮している。

気付かれていないが海洋廃棄のプラスチックの 45%は漁網等の漁具類が占めている。

漁業の現状は海の生態系、ひいては地球環境を壊しつつある。世界的に sustainable fishing の必要性が叫ばれ、海洋管理協会 (MSC) が基準を設け sustainable seafood との認証マークを出している。だが、取材では MSC のチェック機能は十分でない。

では、捕獲ではなく養殖にしたらどうか。今世界で食べている魚介の 5 割以上が養殖だという。しかし、養殖のためには餌として何倍もの魚が必要であり、エビの養殖のため広大なマングローブが失われるなど、海洋環境に大きな負荷をかけている。

この辺りから制作者の視点が大きく振れ始める。

代替食品はどうか。植物原料のエビなど食用可能な製品が既に生産されている。

他方、魚には水銀や種々の産業汚染物質が累積しており、健康に必ずしも良くない。

魚は相互に意思疎通が出来、殺される時には苦痛を感じる。殺すのは可哀想ではないか。

結局魚を食べる我々が海にダメージを与えているのであり、食べないのが最善ではないか。

Don't eat fish!